

れいわ ねんど だい かい しずおかしたぶんかきょうせいきょうぎかい ぎじろく  
令和4年度 第4回 静岡市多文化共生協議会 議事録

- 1 日 時 2023年3月3日(金) 19:00~20:30
- 2 場 所 静岡市役所 静岡庁舎三階 茶木魚
- 3 出席者 多文化共生協議会委員11名  
高畑 幸、長阪 有美奈、磐村 文乃、小川 毅、加藤 伶奈、  
中島 一彦、中村 直保、野田 敏郎、パメラ ジュール、  
ホリウチ アリッセ イズミ、松永 秀昭  
望月観光交流文化局長、岡村観光交流文化局次長、事務局
- 4 傍聴者 1名
- 5 次第  
1 開会  
2 議事「静岡市多文化共生推進計画」案の報告(事務局)  
計画案及び静岡市のまちづくり等に関する意見交換  
3 その他  
4 閉会

事務局（萩原）：ただ今から、令和4年度第4回静岡市多文化共生協議会を開会いたします。本日は伊藤委員とゴー委員にあらかじめ欠席のご連絡をいただいております。本日の会議も記録の為に、録音させていただきます。

それでは、さっそく議事にうつらせていただきます。司会を高畑会長お願いいたします。

高畑会長：こんばんは。今日は今期の協議会の最終回ということになります。今日も活発なご意見をみなさんからお願いします。まずは、事務局から静岡市多文化共生推進計画の案について、説明をお願いします。

事務局（興津）：【「静岡市多文化共生推進計画」案の報告】

高畑会長：いずれの資料も大変見やすく、図や数字が多く、わかりやすく作っていただきました。短期間で形にいただき、私たち意見も反映させていただきました。ありがとうございました。

本日は、皆さんにご意見を伺う時間がたっぷりある回となっております。先ほどの事務局の説明や、今までの審議内容を踏まえた今回の「静岡市多文化共生推進計画」への皆さんのお考えや思い、今後の静岡市のまちづくりや、協議会のこれまでの振り返りなど、一人3分程度でお話をさせていただきたいと思っております。一回りした後に残りの時間で自由な意見交換の場を作りたいと思っております。

長阪副会長：特に資料1と3は凝縮したたくさんの情報を盛り込んでいただいていると思っております。今まで議論してきた思いが伝わっている印象です。耳を傾けていただき、修正していただいたので、修正箇所はありません。皆さんすごく活発に議論をしてくださったと思っております。時々私や皆さんから辛口の意見があったかもしれませんが、だからこそ、こういう資料が出来上がったと思っております。

磐村委員：この資料を拝見して感無量です。この条例、計画案に関わらせていただいたことを非常にありがたく光栄に思います。

私はやさしい日本語の普及活動をしていますが、それも盛り込んでいただきました。いざという時にやさしい日本語でコミュニケーションが取れるよう、また、学ぶ機会がえられるよう、多文化共生の意識醸成の土台になることを願います。そのために、私ももっと普及啓発に取り組みたいです。

学び合い交流する機会を設けることも入れていただき、外国から来た方が住みやすい環境整備や相談体制の強化、日本語教育の推進ももちろんですが、やはり日本人がもっと新しく来た方の文化や言語を学ぶことが大切です。まずは学び合い、協同でまちづくりに取り組む、あるいはSDGsといった世界共通の課題に取り組む機会が増えていくことが期待されます。その際に一人一人のアイデンティティーを大切に、差別されず、人権が尊重された上で、個々のキャリア形成がなされることを望みます。

担い手づくりとネットワークについて、今後多文化共生に関わる方の連携の輪が、大きく広がって行くことが期待されますが、どこに行けばその情報が入るのか、情報の入手しやすさ、人と人とを繋ぐコーディネーター的な役割が重要になっていくと思っております。静岡市は、政令指定都市の強みを活かして、ぜひグローバルに考えるという形で計画を練りつつ、展開して下さることを切に願います。

小川委員：事務局の説明を伺い、これまでの協議会の話し合いが、このA3の1枚の中に、上手にまとめられていると思いました。カラーで見やすく、これまでの話し合いを振り返ることができました。

自分は教育現場の人間なので、小学生・中学生の若い年齢の子どもを育てることを考えたときに、多様性をいかに理解していくかが、非常に大事な課題であると日々感じます。日本人同士、仲間同士でも意思疎通が難しい中で、お互いに意見をだし合い、違う意見とも折り合いをつけて、合意形成していくような働きが、少しずつ積み重なって、外国籍の方々と、うまく付き合っていけるようになって感じます。

自分自身も協議会に参加している時には、もっともな意見を話していますが、実際に対面した時に、現場でなかなか対応できないかもしれないという思いもありました。そうした時に、日本に来た外国籍の方たちのことを考えるためには、日本人がもっと外国に出て苦勞しなければいけないのかなと思います。外国に出かけて苦勞をすると、日本に入って来た方々の苦勞が分かる、ということも子ども達に伝えていきたいです。加藤委員は海外に出かけて行って、たくさん経験をされているし、外国籍の方々に対する理解も大きいです。知らないで対応していることと、知っていて対応できていることの差が大きいと思います。まだまだ、我々がやらなければならないことを感じています。これからも、協議会に参加したことを機会に、進めていきたいです。

ホリウチ委員：計画は短期間で分かりやすくまとまっている印象です。私は主に大学関連の仕事をしていますが、その他に医療通訳と司法通訳をしています。パブリックコメントの結果から、「施策1 安心できる生活環境づくり」が、最も関心のある施策だということがわかります。私自身、医療通訳・司法通訳として、日本で長年暮らしている永住者は、いまだに工場などへの派遣で厳しい条件で働く労働者が多く、健康に不安を持っている方も多く、高年齢にともなう健康問題も生じ、介護が必要となっている方たちも多いです。私は20年以上前から医療通訳に関わっていますが、いまだに、医療通訳の人材確保問題が解決されません。社会福祉の観点からも健康支援に力を入れて欲しいです。

静岡市多文化共生総合相談センター、SAMEのヘルプラインもあります。適切な情報発信や情報提供を工夫しながら取り組んでほしいです。いまだに、どこで誰と相談ができるのか、とよく聞かれます。最近、司法通訳ではブラジルの政府機関や、日本で弁護士として働いているブラジル人の方々と、セミナーに参加しました。ブラジル人のコミュニティの中では、家族で来日している方たちが多く、その中で様々な理由により、最近離婚率が上昇しており大きな課題となっています。私も、最近離婚手続きについて、弁護士との相談の通訳をしました。日本とブラジルの法律が違うので、どこで相談ができるのか、外国人住民への相談対応や情報提供において、単なる窓口や受付にならず、効果的かつ効率的な対応をおこなって欲しいです。地域の様々な関係者との連携を進めることが必要で、こういった外国人支援は、外国人住民自身の自立支援にも繋がるので、ぜひしっかりと計画的に進めて欲しいです。

パメラ委員：大量な情報を読みやすく作っていただきました。いくら情報があっても、分かりやすく・見つけやすくないと、人の目に入らないし、意味がないです。主にネット上で見るように言っていました。このままだとパソコンや、特に携帯は見づらいです。予算の問題だとは思いますが、ネット用の形を作ってくれれば、もっと人の目に触れると思います。

振り返ると、私は20年前の国際化推進計画の時や、最初の外国人住民懇話会にも関わりましたが、その時と比べると、静岡も世の中も変わってきています。国際化推進計画の時は「世界中の様々な人が静岡で出会い・交流する」というきれいな内容でしたが、交流して楽しい、で終わってしまう計画でした。今回の条例と計画で特に好きな所は、「ともに行動する」というところです。多様な市民と一緒にこのまちを作る意識が高まり、完ぺきではないけれど、本当の多文化社会に少し近くなっています。この計画がもっと広がって、国や主義だけではなく、ジェンダー・教育・宗教等のあらゆる面でも、外国人・日本人が、お互いに認め合う社会になると思います。

最近まちを歩いていて、青葉公園からペルーの音楽が聞こえてきました。小さなイベントで、フードトラックやバンドがあるだけ。市や SAME 主催ではなく、何のイベントかわかりませんでした。気楽に自分たちが楽しんでいて、人もふらっと入って来て、これが理想的だなと思いました。「わいわいワールドフェア」もよいですが、もっと気楽に自分のコミュニティがお祝いできるような形があったらよいと思います。今回も協議会に参加出来て、光栄でした。

松永委員：このように、各委員の方々に発言を求められたのは、2年ぐらい前に市長がいらした時に、それぞれ発言を求められた時以来かと思いますが、その時に私は「外国籍の方の生の声を拝聴できるのを楽しみにしている」と言いました。まさに協議会に出席するのが楽しく、勉強になりました。計画を条例に位置づけたということは、所管課の覚悟を感じます。計画を検討するにあたって、委員の方々の半数を外国籍の方が占める、あるいは外国籍の方のアンケートを実施されたということで、広く意見を求めた結果として、この計画ができあがっていると思います。

先々週ベトナムに行ってきました。ベトナムは国のなりたちも違うので、北部はおとなしく控えめ、南部の方は活発で明るい性格らしく、同じ国でも気質が違うようです。静岡市在住の外国人の国籍数は、以前80だったと思いますが、今は90と変わっていました。90もの国の方がいることを考えると、パブリックコメントでも、市民の意見聴取の中で、外国人の考えをもっと聞いて動いたほうが良いという意見もあったので、ひとつの提案です。推進体制の中で、外部組織として多文化共生協議会が進捗状況を位置づける形になるとと思いますが、これと並行した形で、外国人が主体となった意見交換会を設けて、協議会と両輪で動かし、なるべく多様な国籍の方々の意見を計画の進捗にあてて、アップデートしたらどうか感じました。非常に練られた良い計画ができたと思いますので、計画は策定して終わりではなく、これからいかに実効性のある計画として PDCA (Plan (計画) → Do (実行) → Check (評価) → Action (改善)) のサイクルを繰り返すことで、継続的な業務の改善を促す技法を回していくことが重要です。ぜひ多くの方々からご意見をいただき、アップデートして、より計画を実現するように、がんばっていただきたいです。

加藤委員：このような場に参加させていただき、学びが多くありました。90ヶ国以上の外国人がいるということで、すでにともに生きているけれども、なかなか身近に感じてもらえることが少なく、外国人の知り合いがいない人が、アンケートでも4割あったということで、これからこの計画を進めることによって、その割合がもっと少なくなり、話の流れでも「この国籍の友達が…」という会話が自然にできるような静岡になったらいいなと思います。静岡が好きという外国籍の方も多いし、日本で他の県に住んでいた方も静岡県に移住する方が多いと思うので、みんな同じ静岡人として、協働してもっとよい静岡市に

なったらと思います。

自分自身も、できることの中で取り組みをしていきたいと思います。自分はアフリカに2年間行かせていただいたことで、日本に住む外国籍の方は、どういう生活をしているのか、目を向けることができました。小川委員もおっしゃっていたように、もっと外に出る人たちが増えたらいいと思います。その中で、自分もアフリカのタンザニアのことならお話しできるので、機会があれば使っていたらいいと思います。

中村委員：この2年間、地域の一人として、「外国人が日本の生活にどう馴染むのか」をこの場にながら、ずっと頭に描いていました。私が小さいとき、うちの近くに修道院があり外国人にも違和感がありませんでした。そうした違和感の有る無しが、多少日本人の心の狭さというか、外国に長く行くことが無い時代に育った人の意識なのかと感じます。4つの施策は、みな地域に当てはまるものです。「安心して生活環境」がまさしく、今地域で自分が求めている、「安心安全で住み続けられるまちをつくらう」です。多文化共生は、やはり住み続けるために、人と人がどうやって共生していくかということだと思います。

教育においても同じです。最近小学生から英語を勉強しますが、国際語として、これからは日本語と同じぐらいの重さを持って教育されます。交流の場づくりにして同じです。私は、国際ことば学院と二十何年来のお付き合いを地域でしていただき、いろんな所に参加していただいたり、先代の理事長とも我が家で話をしたりしましたが、自分もことば学院と接して良かったなと思います。

今、自治会では、担い手づくりが一番の問題点です。周りでお話ができるような組織作りがまさしく担い手づくりであり、私も自分の微々たる力を発揮したいと思っています。例えば歩いているスペインの親子に声をかけました。お母さんは言葉が通じないので、子どもに通訳してもらいました。我々日本人が、「接する」という気持ちを前面に出さないと、この計画も「絵に描いた餅（何の役にも立たないものの例え）」になってしまいますし、せっかくの条例がもったいないです。静岡市にいる外国人は11,000人、静岡市の総人口は68万人、68分の1をどうやって救おうか、共通の場に出てもらおうか、我々の力を発揮しなくてはなりません。素晴らしい2年間にさせてもらいました。

多様化が、良い悪いにかかわらず、何でもありきになって、コロナ禍の3年間で行動できなくなり、委縮して価値観の違いが出ている人たちに、どうやって共通の意識を持たせていくのが気になります。また、施策1で「暮らしやすい」とありますが、「暮らしにくい」と感じるのはどこなのか、それを解決しないとパーセンテージが上がらないので、そこをまた話し合いができればいいと思います。

中島委員：今日の静岡新聞の裏から2枚目に、「技術・人文知識・国際業務」の資格で入国したネパール人が逮捕された記事がありました。裏側にシンジケートがあつて根深い問題があります。SAMEの現場はまさにそういう世界で、今日も相談が何件かありましたが、労働基準監督署がらみの相談が多いです。先ほど、どこへ行ったらよいか分からないというお話をいただきましたが、SAMEもまだまだキャパシティが足りません。計画を作り、それで多文化共生社会がバラ色に見えたら、間違いだと思います。現場にいと、多文化は、社会が生むリスクのひとつだと思います。それをどういう風に未来に投資して、良いリスクに変えていくかが重要です。人間の行動は感情と知識であり、感情、すなわち共感「empathy」だけでは行動は変わりません。さきほどの新聞記事の事件も基本的知識がないと、行動が変わらないとす

れば、行政の施策としては、知識をきちんと伝えていかなければならないと思っています。

「多文化共生推進のまち推進条例」と「まち」が入っているのは素晴らしいです。アクションがあるし、「まち」にちゃんと実装していくということが出ています。一方で、多文化と共生の関係があまり明確ではありません。共生という大きな枠の中に、多文化が含まれると思っているので、静岡市全体としてはもう少し外側をインクルージョン、LGBT等いろんなことを含めて、共生という枠組みの中で動けるような、大きな施策にしていけないと住みやすいまちにはならないと思います。そのためには、目に見える形の拠点を必要で、それを次の目標に掲げれば良いと思います。

この計画は総合計画の下に位置づけてあり、総合計画の横断的な視点の中に、多文化共生の視点も入りました。それとは別に条例もあります。構造的にどうなるかと思って、絵を描いたら、複雑すぎてよく分からなくなってしまいました。この計画がどういう位置づけなのかをビジュアル的に、分かるように整理しておく必要があります。

野田委員：私はこの協議会に、日本語学校の校長という立場で、多文化共生に日本語教育も大きな役割があるので、その観点から参加を求められ何年か参加しています。日本語教育をからめて感想を述べます。今の時代、すべてのものが急速に変化していますが、日本語教育も、すごいスピードで体制が変わってきています。日本語学校は、来年の4月から、政府（文部科学省）が認定する制度に変わり、日本語教員も国家資格になります。これも1年で準備しなければなりません。民間の日本語学校と地域との関わりが、人の動きも含め、これからどんどん変わってくるような気がしています。地域と結びつくかはまだ不透明です。まったく予想がつかないので、今回は8年計画ですが、いつか「もう、こういう時代じゃない」となる可能性も出るのではないかと思います。時代の変化は速く多文化共生についてまったく新しい概念が登場するかもしれません。そうはいても、基本的な人と人の関りは普遍的で、施策の4には関心を持てます。今後、日本語教育もそうですが、海外に出ていく人が増えて、海外との関わりあいがあるまちが望ましいと感じました。

高畑会長：学び合い、外国から来た方の生活状況を我がこととして考えられる人が、特に若い人で増えてほしいです。医療・司法の通訳者が、「仕事」として、関わるべきことなのに、ボランティアになってしまっています。担い手づくりをどう進めていくかが「肝」です。

パメラ委員がおっしゃるように、対面交流の場面をもっと増やすことや、「多文化共生月間を定めて集中的にイベントを」の部分は皆さんが求めていることだと思います。新たな出会いや理解、地域活動が進んでいくと思います。情報はSNS・ネット・新聞でも伝えられますが、感情は対面でないと伝わらないことが多く、こういった場を作ることが、コロナの収束によって増えることを楽しみにしています。

中島委員がおっしゃるように、計画をもとに、多文化共生の拠点をすることを今後実現したいです。目に見えて、通りがかりに何かがあり、初めて人は認識し、参加してみようと思うので、期待しています。

松永委員がおっしゃった、外国人の意見交換会を協議会とは別という意見について今回の協議会で2年間は日本語で成り立っている空間で、日本語がネイティブレベルにできる方々が参加していただいたものです。日本語が苦手な人、日本語では言えないが自分の言葉ならもっと言いたいことがあるという人を含めた、意見交換会を多言語で行ない、その意見を協議会に反映させる、言語を問わない意見交換会ができれば良いです。今後もしろんな発展が考えられます。

高畑会長：では、残り15分ほどはフリートークになります。みなさんからのご意見や多文化共生の拠点について、今後の具体的な活動内容など、ご意見がありましたら、お願いします。

ホリウチ委員：さきほどの（事務局の）説明からリーフレット作成予定とのことですが、静岡市には500人以上のブラジル人の方が住んでいますが、ポルトガル語で作らないのは何か理由があるのでしょうか。

事務局（興津）：翻訳費用が限られているので、限定的にしていますが、なるべく多言語で発信したいと考えています。パッと見で、できればエッセンスだけでも、ポルトガル語やフィリピン語等、より多くの言語で、挑戦してみたいと思います。特別に費用が多くかからなければ、今年度中ではなく来年以降でも取り組んでいきたいと思ひます。

パメラ委員：翻訳だけなら、ネットでの無料翻訳もありますのでお願いします。

磐村委員：私は長く海外にいて、どこで交流したかというところ、お茶屋さんです。静岡市はお茶のまちでもあるので、お茶でコミュニケーションがはかれる場所があるといいなと思っています。

日本人は内向きだと感じていますが、やはり外に出て欲しいです。「静岡人」の定義が「ともに暮らす」ということに納得して議論に参加していました。海外で出会う人、仲良くなる人は、静岡出身の人が多く、みんな静岡愛があるわけです。外から見ると、静岡にこんなものがあつたらいいね、こうなつたらいいね、という夢を語ります。そういう意見も組み入れてくれるといいなと思ひました。世界を見て、「グローバルに考える」ようになってくれればいいと思ひます。

中島委員：パメラ委員が言ってくれた、カジュアルなコミュニティの集まりが、わいわいワールドフェアの理想かなと思っています。

自分たちの経営企画を作るにあたり、企業側の計画を見ているのですが、資生堂・キリンホールディングスが、何のために社会にあるのかを分かりやすい言葉で言っています。キリンは自分のことをビール屋さんとは言わないです。「よろこびがつなぐ世界へ」というフレーズで、自分たちがどういふ企業なのか、タグラインみたいなもので、ワンフレーズで落とすようなことをしないと、特にwebではたどりつかないと思ひます。そういうことを特にwebに展開する際にはどうかと思ひます。

高畑会長：ちなみに、「タグライン」を簡単に説明していただけますか。

中島委員：一番有名なタグラインは「お口の恋人ロツテ」ですね。昔からありますが、とても評価が高いです。日立は「Inspire the Next」、私たちはどういふ存在なのか、一言で落とし込むのが、タグラインなので、この計画を一言で言つたら何なのか、難しいですがやれば伝わりやすくなると思ひます。

長阪副会長：外国人主体の意見交換会という松永委員のご提案はとてもいいと思ひます。そのとき言葉をどう絞りますか。いろいろな国の人、日本語できない人がどうコミュニケーションを取るのかと、あまり

にもたくさんさんの国だと、文化の問題、例えばアジアとヨーロッパの人は理解し合えるのか、外国人同士が不安を感じるかもしれません。分けて欲しくないですが、どう進めるかは課題にもなり得ます。パメラ委員も触れましたが、AI自動翻訳ソフトはいろんな企業が使っています。外部向け以外の情報はコロナ以降著しく時代が変化して外国語翻訳イコールAI時代が来ています。例えば、あと一年したら、外国人コミュニティでパーティーをやるとなると、みんなポケットから機械を出して、AI としゃべっているということもあり得ると思います。そういうことも頭に入れておいて、時代とどうやって付き合っていくか考えたほうがいいと思います。

加藤委員：さきほどのお話で、日本人は内向きだというお話があって、私は海外に行きたくて仕方がないですけど、紹介させていただきます。資料を二部ずつ取って回してください。私は2月から JICA 静岡デスク、場所は静岡県の国際交流協会の中に位置していますが、そこで仕事をしております。国際協力、JICA事業、JICA海外協力隊の理解や参加促進の仕事をしています。もっと外に出る人が多くなって、海外を知って日本に帰って来てほしいというお話がありましたが、まさにそういう人たちが多く輩出していききたい仕事になります。こちらのデスクを活用してください。例えば学校等での出前講座で元協力隊が話をします。静岡の中央図書館で協力隊の写真展を予定していますので、興味がある方がいたら、ご紹介いただけるとうれしいです。国や文化を知ってもらう入口になればいいと思います。

高畑会長：加藤さんのように、海外に行きたくてたまらないという人へたくさんさんのチャンスをこれから作っていただきたいと思います。円安や燃料高で海外に行くハードルが高くなっているの、それを補助できるような制度とか、情報を集めていきたいと思います。

今回は、今期の協議会の最終回です。私も任期満了で、こちらの協議会とお別れになります。特に今期は条例を作るという大きな仕事、人生でそうそう無いのではと大変貴重な体験をさせていただきました。今期はコロナに始まり、コロナに終わるということで、ずっとマスクをつけている2年間でしたが、ここで対面での話をさせていただき、活発に意見交換できたことは、楽しい2年だったと思います。今までありがとうございました。進行を事務局にお返しします。

事務局（萩原）：皆さん、今日も貴重なご意見ありがとうございました。次の施策・事業に繋がる意見をいっぱいいただきました。昨年の第2回協議会で、皆さんに多文化共生のまちのあるべき姿を考えていただき、意見交換した時の資料がすごく勉強になり今でも悩むときに見返しています。これからも皆さんの記録をどんどん活用していきたいと思います。ありがとうございました。

最後に閉会にあたり、観光交流文化局長と局次長からご挨拶をさせていただきます。

望月観光交流文化局長：皆さん、こんばんは。本日も本当に素晴らしいご意見をいただき、ありがとうございます。早いもので、この10期も本日が最後ということで、名残惜しいんです。最初に皆さんに委嘱させていただいたのが、2021年の5月25日という記録が残っています。その時からこの条例、計画づくり、私もできる限り参加して、皆さんのご意見を聴かせていただき勉強させていただきました。高畑会長を中心に、非常に素晴らしいチームだと思っております。今回条例・計画ができましたが、皆さんがおっしゃるとおり、「絵に描いた餅」にならないように、実行性のあるものにしていかなければ



ならないなと思ひます。皆さんからいただいたご意見をしっかりと形あるものにしていきます。

皆さんのチームのこだわりのひとつにあったのが「みんな静岡人」だと思います。多様な市民という意味での静岡人だと思ひます。私はこの名札の裏にちらっと「みんな静岡人」が見えるようにしています。良い条例・良い計画を皆さんに作っていただいたことに感謝申し上げます。次の11期の委員の選出をさせていただいているところですが、より具体的なものを次の委員の皆さんと作り上げていきたいと思ひます。今期で解職になる委員の皆さんにおきましては、引き続きいろんな所でご指導いただければと思っております。

さきほど、高畑会長のお話にもありましたが、コロナに始まり・コロナに終わるということで、コロナもだいぶ収まってきましたので、何となく集まってご苦労さん会をやれたらと思っております。その際にはマスクを外して、皆さんの顔を拝見しながら、楽しいお話ができればと思ひます。本当に2年間ありがとうございました。

岡村観光交流文化局次長：たくさんの活発で貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。私も局長になったのと同時に、皆さんの10期にいたしました。それまではまったく違う仕事をしてきたので、この協議会自体が刺激的だったわけです。条例と計画を作るということで、傍聴していただいた方も2年間でもとても多く、今日もいらっしゃっていますが、本当にありがとうございました。傍聴していただいてまで、やれる業務は市役所の中できなかな無いです。条例ができた時にも、同じことを言ったと思ひますが市の職員として条例を作る経験があまりありません。皆さんに作っていただいた条例の案も、最終的に政策法務との間で言葉をなんで変えちゃうの？ということがありましたが、それはともかくとして、皆さんに作っていただいたのは、大きいことだなと思ひます。市政に市民が参加する、というのが、実際に本当できると思われていないのですが、ここでは意見もたくさんいただき、羨ましい協議会だったというのが、私の感想です。

さきほども皆さんから、いろんな人たちが、いろんな言語で、いろんなことを立場が違えば、なかなか噛み合わないのではないかという話も出ましたが、それをまとめられるのが「みんな静岡人」だと思ひました。静岡に長く住み続けられる状況を作りたく、という目標にみんなで近づいていければよいなと思ひました。価値観がたくさんある中でも、ある程度まとまっていけるのかなと、皆さんの意見を聴いて、感じたところです。そのための推進計画がほぼ今回まとまりました。条例を実際に実施する計画を作ったあとは、どう実行していくのかとなり、今日も貴重な意見を言っていました。

この計画に基づく多文化共生のまちづくりは、来年度から始まります、第四次静岡市総合計画の横断的な視点でもあります。担当の国際交流課だけではなく、全庁で取り組んでいくということが書かれています。さきほども出た拠点づくりや担い手をどうするか、8年をかけて多文化共生のまちづくりに行政も努力をしていきたいと思ひます。皆さんも、ぜひご協力と監視をしていただき、「おかしいんじゃないの？」と違う方向に行かないよう言っていただきたいです。私もこの3月で退職となりますが、この条例と計画ができて終わりというのは、私としてはありがたく充実した2年間でした。皆さまにおかれましても、引き続き協議会だけではなく、多文化交流のイベントや講演、その他関連事業での指導、ご協力をお願いして、お礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

事務局（萩原）：以上で第4回静岡市多文化共生協議会を終了いたします。

い じょう  
以 上

かいぎろくしよめい  
会議録署名

たかはた さち  
高畑 幸